

学力向上フロンティア事業中間報告書

都道府県名 福島県

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	喜多方市立第一小学校								教員数
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	38
学級数	4	3	3	3	3	3	2	21	
児童数	99	86	108	90	107	100	7	597	

研究の概要

1. 研究主題

個が生きる授業の創造 ～ 確かな学力の向上をめざして ～

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

1年生～4年生国語（学校として当該教科に関する研究実績があるため）

1年生～6年生算数（学校として当該教科に関する研究実績があるため）

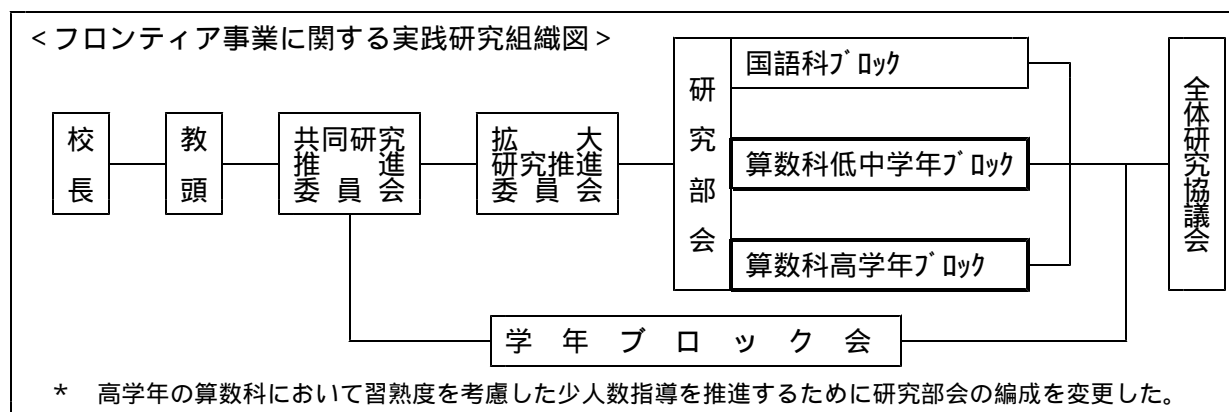
(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ 個が生きる授業の創造 ～自ら学び確かな力が育つ授業の構想～</p> <p>研究の見通し（仮説） 個を生かした学習過程において、次のような手立てをとれば、自ら学び、確かな力を身に付けた子どもが育つであろう。</p> <p>研究内容・方法 仮説に迫るための手立てとして、以下のような方策を持って研究を推進する。 教材の本質と自分の生活とのかかわりをおさえる教材分析・開発 基礎的・基本的内容の定着を図るための場の設定・指導体制の工夫 個々の思いや願いをとらえる見取りの継続 個々のよさを授業の中で生かすための指導展開の工夫 学習状況を振り返り、次への意識や意欲を高める評価のあり方</p>
--------	---

平成15年度	<p>テーマ 個が生きる授業の創造 ～確かな学力の向上をめざして～</p> <p>研究の見通し（仮説） 個の実態に応じて、計画、指導、評価の各段階において、次のような手立てをとることにより、確かな学力を身に付けた子どもが育つであろう。</p> <p>研究内容・方法 基礎的・基本的な内容の明確化と個の実態を生かした指導計画の工夫 ○ 基礎的・基本的事項の明確化と評価規準の見直し ○ 子どもの実態に即した教材開発 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫 ○ 個の実態に応じた学習過程・学習形態（個別指導・グループ指導）の工夫 ○ 少人数指導、T・T指導など指導体制の工夫改善 算数科 ・ 交換授業（教科担任制）の促進・試行 実践事項 学習効果を高める評価の工夫 ○ 評価方法の工夫改善（自己評価・相互評価の工夫、指導の過程における評価の工夫） ○ 個々の学習状況をとりえる見取りの充実 * 研究内容の一層の焦点化を図るために、副主題、研究の見通し及び研究内容を修正した。</p>
--------	---

平成16年度	<p>テーマ 個が生きる授業の創造 ～確かな学力の向上をめざして～</p> <p>研究の見通し（仮説） 個の実態に応じて、計画、指導、評価の各段階において、次のような手立てをとることにより、確かな学力を身に付けた子どもが育つであろう。</p> <p>研究内容・方法 基礎的・基本的な内容の明確化と個の実態を生かした指導計画の工夫 ○ 基礎的・基本的事項の明確化と評価規準の見直し ○ 子どもの実態に即した教材開発 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫 ○ 個の実態に応じた学習過程・学習形態（個別指導・グループ指導）の工夫 ○ 少人数指導、T・T指導など指導体制の工夫改善 算数科 ・ 交換授業（教科担任制）の促進・試行 実践事項 学習効果を高める評価の工夫 ○ 評価方法の工夫改善（自己評価・相互評価の工夫、指導の過程における評価の工夫） ○ 個々の学習状況をとりえる見取りの充実</p>
--------	--

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

<国語科>

(1) 「基礎的・基本的な内容の明確化と個の実態を生かした指導計画の工夫」について
単元の構想を立てる際、目的意識を高めるために、身近なテーマを掲げ取り組んできた。単元のサブタイトルを工夫することにより、話題が多様化し、意欲的に取り組む姿が見られた。また、クイズ形式、ニュース形式など「話し手」「聞き手」共に楽しむことができる活動を取り入れたことも言語意識を高める上で効果的であった。

(2) 「個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫」について
「話し手」「聞き手」のポイントを具体的に提示することにより、一人一人がめあてと見通しを持って活動に取り組むことができた。また、常にポイントに沿って振り返り、活動を焦点化することにより、基礎的・基本的な内容の定着を図ることができた。
少人数グループでの活動を取り入れ、話す機会を多く設けてきたところ、自信を持って話することができる子どもが多くなってきた。
・ ペアグループ一斉での活動では、一人一人が積極的に生き生きと話す姿が見られると共に、適切な音量を意識しながらその場に合った大きさを話す姿も見られた。
・ ポスターセッションやペア学習で、相手を次々と変える活動においては、話を繰り返すごとに言葉を膨らませたり、説明を増やしたりする工夫が見られるようになった。新鮮な話題を次々と聞くことができる楽しさから聞き手も興味を持って活動することができた。
・ グループ一斉グループの形態では、全体の場で発表した友達のよさを自分の発表に生かし、2回目のグループ活動で言葉を膨らませて話したり、大きな声ではっきりと話したりするなどの変容が見られ、より相手に伝えようとする意識が高まった。

(3) 「学習効果を高める評価の工夫」について
振り返りカードの活用により、子どもが意欲的に活動に取り組む姿が見られた。めあてに即した振り返りをさせることにより、自分の達成状況を自覚させ、成就感を味わわせることができた。「聞き手」の意識を高めるためにも有効である。

<算数科>

(1) 「基礎的・基本的な内容の明確化と個の実態を生かした指導計画の工夫」について
指導計画を作成する際に、1単位時間毎の評価の観点を1～2つに絞って評価規準を設定したことにより、指導の重点化を図ることができた。また、1時間毎の子どもの学習状況をとらえやすくなった。
指導計画に発展的な学習や補充的な学習の時間を位置付けたことにより、一律に練習問題に取り組むだけでなく、子どもの学習状況に応じて復習をしたり、習熟を図ったりすることができた。特に、複数の教員で指導するT・Tや少人数指導の場合は効果的に取り入れることができた。

(2) 「個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫」について
身近な生活と関連のある問題を提示することにより、子どもの課題意識や課題解決への意欲を高めることができた。また、問題にめあてとなる内容が含まれる場合には、めあてを設定せずに問題の提示だけで授業を進めることを試みたが、子どもの思考を途切れさせることなくスムーズに課題解決につながることもできた。
低学年では、課題解決の段階で具体物と数字を結びつけるために、ブロックなど半具体物の操作活動が有効であった。思考を補助する道具として日常的に活用できるようにさせたい。
中学年のT・Tでは、座席表などを活用して互いの連携を密にし、子どもの見取りや個別支援を計画的に分担して行うことにより、個に応じた指導を充実することができた。学

習内容の定着を図る段階においても、コース別の学習活動を展開するなどして、子どもの力を伸ばすことができた。

高学年では、単元を通して、または単元の途中で習熟度別のグループを編成し、各グループの子どもの実態に応じて授業を工夫してきた。5名の指導者を配置したことにより、グループによっては10名程度の少人数指導が可能となり、きめ細かな指導をすることで、学習内容の定着を図ることができた。また、習熟度の高いグループでは、発展的な問題に意欲的に取り組む姿が見られた。

担任以外の教員が指導する場合、子どもの実態把握に時間がかかる面があったが、年間を通して指導してきたことにより、当初の問題点は解消されてきた。また、コース間での情報交換や発展問題・補充問題などを共有化することにより、協働体制が強化され、指導法の改善につながった。

(3)「学習効果を高める評価の工夫」について

1時間毎にチェックテストを行い、一人一人の理解状況を把握した。その結果に基づき、十分理解できた子ども達は練習問題に取り組み、理解が不十分だった子どもには個別、または小グループでの再指導をすることにより学習内容の定着を図ることができた。

座席表やチェックリストを活用して子どもの学習状況を記録することにより、子どもの変容や理解の状況をとらえることができた。また、子どものつまずきや考えの傾向を予想して次時の授業を構想することができるようになってきた。

2. 今後の課題

<国語科>

「話すこと・聞くこと」の年間指導計画を作成したが、今年度の実践を通して、系統性、発展性がより明確となるように修正していきたい。

グループでの学習を充実させるためには、他の学習においてもグループ学習の機会を設け、学習の進め方を定着させていく必要がある。また、グループ学習における相互評価の仕方や生かし方も身に付けさせていきたい。

評価項目の精選、客観的な評価ができるような工夫、次時へつなげる評価の工夫について研究をさらに深めていきたい。

<算数科>

子どもの課題意識や学習意欲を高めさせるために、単元全体を通して課題解決を図っていく単元の構成も工夫していきたい。

学習内容の定着を図る段階では、子ども一人一人の学習状況に応じた発展的・補充的な問題の質や量、場の設定についてさらに実践を重ねていく必要がある。

T・Tでは、互いの役割や授業の進め方などを固定化せず、子どもの実態に応じた多様な指導形態を工夫していく必要がある。

机間指導の際、個別にアドバイスをしたり、賞賛したりするなど、一人一人の子どもと関わる回数をさらに多くして指導と評価の一体化を図りたい。そのために、指導者が日々見取りを生かして教材研究を深め、短時間での確に指導できるようにしたい。

・ 学力把握のための学校としての取組

- ・ 定期的な学力調査の実施（国語科・算数科） 1月末実施
- ・ 知能検査の実施（2・4・6学年） 5月実施
- ・ 各教科に関わる実態調査（事前・事後） 随時

・ フロンティアスクールとしての成果の普及

- 平成15年度公開研究発表会 平成15年11月11日（火）
- 他校の公開研究発表会において学力向上をテーマとしたシンポジウムに参加し、本校の取り組みを紹介した。
- 研究集録を作成し、北会津管内の小中学校に配布した。（教育事務所経由）

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	／	14年度からの継続校
【学校規模】	3学級以下 7～9学級 13～15学級		4～6学級 10～12学級 ／16学級以上
【指導体制】	／少人数指導	／	T・Tによる指導 その他
【研究教科】	／国語 外国語 保健体育	／	社会 音楽 その他 数学 美術 理科 技術・課程
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		／	有 無